

P-29 子宮頸癌の発癌リスクと
p53 polymorphism

癌研病院

手島英雄, 片瀬功芳, 荷見勝彦

[目的] 子宮頸癌の発癌リスクとしての p53 codon 72 の多型について検討することを目的とした。

[方法] 子宮頸癌症例 158 例を対象とした。内訳は、扁平上皮癌 131 例、頸部腺癌 18 例、腺扁平上皮癌 9 例であった。川尻ら (Carcinogenesis 14:1085, 1993) の公表した健常 347 例を対照とした。方法は、末梢血リンパ球より DNA を抽出し、MASA 法および PCR-RFLP 法で、p53 遺伝子 codon 72 の Pro/Arg を決定した。

[結果] 対照群では、Arg/Arg 41.5% (144 例)、Arg/Pro 47.6% (165 例)、Pro/Pro 11.0% (38 例) であった。扁平上皮癌群では、Arg/Arg 38.2% (50 例)、Arg/Pro 48.9% (64 例)、Pro/Pro 13.0% (17 例) であった。腺癌群では、Arg/Arg 61.1% (11 例)、Arg/Pro 27.8% (5 例)、Pro/Pro 11.1% (2 例) であった。腺扁平上皮癌群では、Arg/Arg 33.3% (3 例)、Arg/Pro 66.7% (6 例)、Pro/Pro 0.0% (0 例) であった。Chi-square 検定の結果は扁平上皮癌群 P=0.73、腺癌群 P=0.22、腺扁平上皮癌群 P=0.41 であった。

[結論] 子宮頸癌の発癌リスクと p53 codon 72 多型については、扁平上皮癌との間には関連が認められなかった。HPV type を考慮に入れた検討も行っている。

P-30 子宮頸部扁平上皮癌における
Thymidine Phosphorylase (TdRPase) の免疫組織学的
発現とその放射線感受性との検討

関西医大

実積真由美, 梅寄圭吾, 岡田英孝, 中嶋達也,
松原高史, 生田明子, 松尾泉, 松岡進,
北田光美, 安田勝彦, 神崎秀陽

[目的] Thymidine Phosphorylase (TdRPase) は血管新生との関連が注目されており、腫瘍の抗癌剤に対する感受性の指標となる可能性が示唆されている。そこで、本研究においては、子宮頸部扁平上皮癌における TdRPase の免疫組織学的発現とその放射線感受性との関連について検討した。[方法] 当科にて子宮頸癌の診断のもと放射線療法を受けた患者のうち、組織学的効果判定基準に照らし合わせ、放射線感受性群 (grade2~3) 14 例と放射線非感受性群 (grade0~1) 13 例を対象とした。なお、照射総線量は全例外照射で 66~76 Gy であった。放射線照射前に生検されたホルマリン固定標本を用い、パラフィン包埋切片を作製し、一次抗体に抗 TdRPase モノクローナル抗体 (日本ロシユより供与) を使い、ストレプトアビジンビオチン法にて検討した。発現態度は、陰性: (-) 弱陽性: (±) 陽性: (+) 強陽性: (++) とした。[成績] 放射線感受性群においては、組織型は大細胞非角化型 11 例、角化型 2 例、小細胞型 1 例であった。TdRPase の発現は感受性群 14 例中、強陽性 7 例 (50.0%) 陽性 3 例 (21.4%) 弱陽性 4 例 (28.6%) 陰性 0 例 (0%) であった。放射線非感受性群においては、組織型は大細胞非角化型 11 例、角化型 2 例であった。TdRPase の発現は非感受性群 13 例のうち強陽性 3 例 (23.1%) 陽性 2 例 (15.4%) 弱陽性 2 例 (15.4%) 陰性 6 例 (46.2%) であった。なお、組織型の違いによる反応の変化は見られなかった。[結論] 放射線感受性のある子宮頸癌では TdRPase 陽性となり、一方、TdRPase 陰性のものは放射線感受性が低い事が明らかとなり、治療効果推定に有用であることが示唆された。